

報告会のまとめ

板倉 豊

(西京塾推進部会長、
京都精華大学人文学部環境社会学科助教授)

塾生の皆さんの発表を聞いて、とてもうれしく思いました。私は、大学で環境教育というものを学生に教えているのですが、大学では授業料の対価として環境教育をするのに比べ、塾生の皆さんの活動はまさにボランティアであり、ああ、すごいな、たくましくなったなとうれしくなりました。グループごとに、非常にウィットの効いたいろいろなおもしろい話をしていただきました。家庭でのごみ減量の工夫については、場内から質問もありましたが、実は私も、家庭で分別のことで怒られています。私の団地では古紙についての分類を細かく行っていますが、新聞紙とカラーの広告をすぐ混ぜてしまのです。

私は、学生を水俣市へ毎年連れていっているのですが、ここでは、今年とうとうごみの分類が23分類にまで発展しました。ごみを分類しているところへ行って業者の方に聞くと、ここのごみはブランドとおっしゃいます。びんは、透明、茶色、青色というように色別に分け、キャップも全部きれいにとってあります。新聞も、先ほどお話しした私のようなのは失格でして、入っている広告のアート紙と新聞紙に分けます。新聞紙のみの束にすると、溶かすときにとっても効率が良いのです。そこにアート紙、ホチキスなどいろんなものが入ると、ものすごく処理費用がかかってしまいます。きれいに分別されているのが良いということで、業者の方にとって水俣のごみはブランドなんですね。

一方、水俣には町内ごとにごみ収集のステーションがあります。たくさんのステーションがあり、だいたい夕方に集めています。そこでは、お年寄りの方が腕章をして、リーダー、指導員として、引っ越してきた人などへやさしく分別のコツを教えてあげています。その現場に学生を連れて行き、市民の皆さんにちょっと本音を聞いてこいと言いました。23分類なんてできない、と本当は嫌がっているのではないかと思ったのです。すると、99%の人は、もう慣れた、当たり前だとおっしゃいました。コツが分かってきて、ごみになるようなものは買わない、もらわないと、体で覚えてきているのです。だから、余計なものや過剰包装のものは絶対にお互い贈りません。一人、本当はじゃまくさいけど長いものには巻かれろで、地域の中で生活していくうえでは、皆がやっているのだから自分だけやらないわけにはいかず、地域のコミュニティのルールを守らないと生きていけない、と正直に言ってくれた方もいましたが、その方もちゃんと出たごみを分け

ています。それからおもしろいのは、授業の一環として、中学生や小学生で、その町内に住んでいる子ども達がアシスタントとして手伝っているのです。そこには地域のコミュニティができていて、中では、誰かがいらなくなったこたつの板や自転車を持ってくると、違う誰かがもらって帰るのです。井戸端会議のように、小さい子どもから年配の方まで皆が世間話をして、楽しそうにごみの分別をしています。十数個もかごが並んでいて、ビニールひも、新聞紙、文庫本、教科書、週刊誌といったように分けています。文庫本などは、



その場で良いものを見つけたら持って帰ります。私の学生もいただいて帰りました。まず減量できるところは減量し、お互いに持ってきたり持って帰ったりします。そして、先ほどもお話したように、水俣市が集めてきたごみについては集積所で細かく分けられているので、業者が他の都市よりずっと高い値段で買います。地域ごとにどのくらいのごみが出たかというのは計算されており、例えば年間12万円売れたとしたら、そのお金はその地域に返します。売れた有価物については全部地域にリターンするので、おもしろいことに地域の地蔵盆などは皆それでできるわけです。いわば、分別をすればするほどお金が入ってくる仕組みになっているので、やっていて楽しいわけです。一番興味深いのは、そういうコミュニティの場での話が非常に弾んでいて、教科書や参考書で余ったものを分け合うなど、どこでも皆さんが楽しそうなことです。



水俣市の人口は約5万人、京都市は約140万人なのだから、そこまでの分別はなかなか進まないのだと言いつけている時代ではなくなってきました。やはり5万人であろうが140万人であろうが、やるべきことはやっていかないとはいけません。水俣も、ここまでいくのには、やはり時間がかかっています。行政が地域ごとに100回も200回もこまめに説明会を開いて、地域のごみリーダーを養成してきました。地域が一緒になってやってきたのです。皆さんご存知のとおり、水俣病というマイナスのイメージがあるのですが、それをなんとか逆手にとろうとしています。この前、「環境市民」による環境先進都市コンテストで1位になりました。ごみを23分類もしているということもありますし、ごみの絶対量がどんどん減っているのです。もう焼却炉を使わなくてもいいくらいざっと減ってきて、この前、生ごみが1分類増えてコンポストの施設が入ったのですが、分類をどんどん増やしているのごみの絶対量がどんどん減ります。それは、皆が賢い消費者になって、ごみになるものは買わない、もらわない、贈らないということをやリだしたから実現したのです。このような取組を、これから京都市でもやっていかないとはいけません。そのためには、本日の西京区の皆さんによる3つのグループの先進的な取組を、ぜひ各区にも広げていってほしいです。

現在公開されている映画のご紹介になりますが、その中で、非常に分かりやすいカエルの実験をしています。カエルというのは、熱湯に放り込むと熱いので飛び出しますが、ぬるま湯に入れて徐々に温めていくと、熱湯になってゆでガエルになっているのに気が付かないのです。まさに、私達の今の状態だというわけです。徐々に温暖化が進むことによって、「暖かくなっていいなあ」などと言っているうちに、全世界の人が大変な目に遭うわけですし、それを警告している映画です。非常にうまい仕組みになっており、これではいけない、ちゃんと台所の生ごみと他のごみを分けないとはいけません、ということが分かってきます。

最後に、私は西京塾に3年間関わっているのですが、塾生の皆さんがたくましくなっていて、うれしく思っています。ぜひこれから、せっかく勉強したことを次のステップに生かしていただき、西京区民が自主的にがんばってやってほしいなと思っていますので、今回の発表を聞いて、本当に誇りに思いました。皆さん、ありがとうございました。